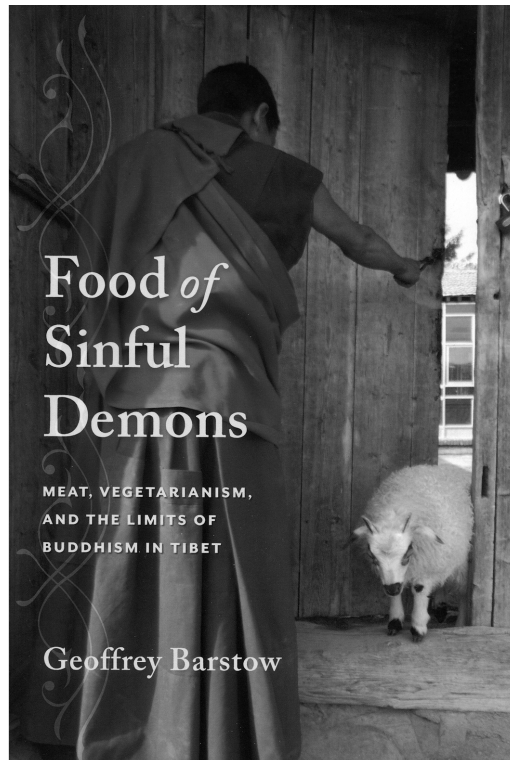


書評：Geoffrey Barstow, *Food of Sinful Demons*
— Meat, Vegetarianism, and the Limits of Buddhism in
Tibet —, Columbia University Press, New York, 2018.

小野田俊蔵



タイトルになっている「Food of Sinful Demons（[肉それは]罪深き悪鬼の食べ物）」という言葉は14世紀のチベットで活躍した戒律の専門家ニャムメー・シェーラブギェルツェン mNyam med shes rab rgyal mtshan の言葉から採られている。

チベット人僧侶と個人的な付き合いがある人には周知の事ではあるが、現代のチベット仏教僧（主として亡命チベット僧）で肉食をしない人はほとんど居ない。しかし彼らは実に戒律堅固で蚊やごきぶりですえ殺せない人がほとんどなのである。つまり彼らの肉食は殺生戒と直結している訳ではない。この本は多くの欧米人が何気なく持っている仏教に対するイメージ、つまり精進食と結びついている仏教世界のイメージ⁽¹⁾（＝平和を愛するリベラルなベジタリアン

?)と、肉好きのチベット僧という現実との間の素朴な違和感をその研究動機としているように私には思われる。

菜食主義的ベースを持ったインド仏教文化の受容にはじまり、家畜とともに生活し肉食が生活の奥底まで習慣となっているチベット固有の文化とのギャップの中で、チベット仏教の先人たちがどんな風に葛藤し、どのようにその矛盾を埋め、理論を構築していったのか、を著者は追いかけている。

本書は著者自身も言うように、大きく分けて二つの部分に分かたれている。第一は、全8章の内、第1章から第4章までで、仏教やボン教などチベットの宗教における菜食主義の位置づけに関して考究する部分である。著者はチベットの様々な宗教人が、時代や地域や宗派など多様で複合的な要素を孕みながら肉食に対してどのような態度を採ってきたのかをこの書の前半で描いている。

第1章 A Brief History of Vegetarianism in Tibet はその前半部分の序章として、千年以上にわたる歴史の中で、様々な宗派や伝統の祖師たちが肉食に対してどのような態度を採っていたかを概観する章である。時系列に基づきながら、チベットの仏教僧やボン教僧たちが、精進生活特に肉食や飲酒に対して言及する様々な言説を多くの文献の中から抽出して紹介している。以降の数章で展開される、より分析的な考察の素材を提供する部分でもある。菜食主義に関する様々なエピソードがチベット史の史料から抽出されて紹介されていて非常に興味深い。

この書の素材の一部ともなっているが、すでに我々は幾らかの研究成果を得ている。例えば、チョナン派のトルポパ Dol po pa Shes rab rgyal mtshan (1292-1361)が肉食や飲酒に対して厳しい態度を採っていたことをトルポパ自身の著作から研究した望月海慧先生の研究⁽²⁾や、パクモドゥパ Phag mo gru pa (1110-1170)の主要な弟子であるジクテンスムゴン Jig rten gsum mgon (1143-1217)が厳格な菜食主義者であり、彼が創始したディクンカギユ派では長い間菜食主義がその伝統としてあったという Hou Haoran の指摘⁽³⁾は知られている。ジクテンスムゴンは肉食や飲酒を禁止しただけではなく非時食戒つまり夕食を摂らず翌日の朝まで断食する修行を弟子達に奨めたと伝えられている。しかし、他の多くの歴史学者や思想史学者は政治史や教義史に関する記述に注視するのが普通なので、断片的なものであっても、食に関する歴史的記述がこのような形で列挙されると改めて驚きを感じる。

著者の指摘の中から興味深い事例を再録すると、サキャ派の中興の祖であるゴルチェンクンガーサンポ Ngor chen kun dga' bzang po (1382-1456)のゴル流は1429年に創設されたエヴァン僧院を中心に栄えたが、この僧院ではクンガーサンポの定めた清規に準拠し、肉や酒の持ち込みが禁止され倫理規定が特に厳格であったとする『クンガーサンポ伝』の記述が紹介される。カルマ派に目を移すと、カルマパ四世のルルペードルジェ Rol pa'i rdo rje (1340-1383)が自ら

の道場への肉や酒の持ち込みを禁止したことは有名な歴史書である『テプテルゴンボ』にも記述があるという。さらにカルマパ八世のミキユドルジェ Mi bskyod rdo rje (1507-1554) はカルマ派本山のツルブ僧院の清規を著したが、彼は僧院内で肉だけではなく卵までも禁止したと記録されているという。

第2章から第4章までの、分析的な考察で著者は、チベット仏教での肉食への態度に深く関わってきた三種の戒律に基づく態度に対応させた構成を採用している。三種の戒律とは、三律儀つまりチベット語ではドムスム *sdom gsum* と呼ばれる、〈別解脱戒〉と〈大乘菩薩戒〉そして〈密教戒〉のことである。その目的や目標がそれぞれ違う三種の戒律の理想や理論が、それぞれに異なった肉食への態度を採らせてきた。三律儀自体はどれをとってみても食の問題に特化したものではなく仏教徒の生活全般に関わることはあるが、著者はそれが食への態度（著者が最も拘っているのは肉食への態度）にもっとも根幹的に関わって来たと考えている。この構成上のアイデアが本書の最もユニークな視点であることには異論はないであろう。チベットの宗教を熟知した専門家ならではの切り口である。

しかし、著者自身が序の中で述べているように、この構成は視点を鮮明にするという利点も当然あるが、個々の事例の問題点を簡素化し過ぎるという欠点もある。時代や地域や個々人の食への態度は「三律儀」だけが決定している訳では当然ないからである。その点に著者自身十分に注意しながら考察は進められる。

先ず一番目の律儀〈別解脱戒〉に基づく態度を考察する第2章を著者は *Meat in the Monastery* と題してその範囲を僧院内に限定している。つまりこの別解脱戒の影響が専門修行者としての出家僧に限定され、しかもその食習慣が僧院内の食事に特化されるからである。一般信者が守る戒は、修行僧とは全く別の戒律つまり優婆塞戒や優婆夷戒、そして一日戒である「八斎戒」に基づく。八斎戒に於いても食に関する禁戒はあるが、それはあくまで限定的で時限的である。そこで著者は僧院内の肉食に限定したのである。チベット仏教は大乘仏教であるにもかかわらず戒律に関しては当初から一貫して説一切有部系の具足戒を正式な僧侶の戒律としてきた。従ってこの章では、大蔵経中の諸律典を文献資料としながら主としてインド起源の食への態度を話題の出発点にする。

インド仏教の出家僧にとって食は基本的に托鉢で乞食し施与された一般信者の残食が食されるのであるが、その施与された食の中には肉や魚が入っている場合がある。戒律の規定ではそんな場合でも「三種の淨肉」(*trikoti-pariśuddha*)と称される例外つまり、三つの観点(実見・実聞・推測)から確認しても自分の為に殺したものだとはっきり確認出来ない肉は食しても致し方ない、つまりあくまで残食の中に混じっていたものなら良い、という例外的肉食許容⁽⁴⁾がある。残飯をもらって生きていることにこそ意義があるのであって、それらの場合は確実に殺傷行為にその僧が関わっていないということなので殺生戒に抵触しないと看做されたのであ

る。この規定を一方では限定的に解釈する僧侶たちもいたし、他方ではやや拡大的に解釈した事例もある。インドと違ってチベット僧院では個々の僧侶が毎日実際に托鉢に出て、そこで得た一般信者の残食を食とする訳ではないので、本来はこの規定は適用され得ないのであるが、インドの仏教ではこの「三種の浄肉」は一定のエクスキューズとしての働きを持っていた。

「三種の浄肉」の説はチベット人僧侶の肉食許容の道を開くために援用されたようで、ゲルク派の祖であるツォンカパの高弟、ケートゥプジェ(1385-1438)が「三種浄肉であっても肉食を経験していた時の習慣力があるのであって、自分の為の味覚への執着を引き起こすことがあるので、初心者の菩薩は肉食を避けるほうが良い」と述べていたことがこの書でも紹介されているが、ゲルク派初期からすでに「三種浄肉」を理由に肉食を行なった僧侶がいたことは大変興味深い。

二番目の律儀〈大乘菩薩戒〉を扱う第3章 The Importance of Compassion では、チベット仏教の思想的哲学的根幹とも言える大乘仏教思想つまり利他行という慈悲の活動と肉食がどのように関わるものかという点に関する様々な言及が考察され分析されている。インド仏教では強調されることが少なかった輪廻思想がチベット仏教では深く浸透して、一部の大乗経論典中に発見されるそのような輪廻の記述を取り上げて、殺生が如何に菩薩の慈悲行や利他の精神に反する行為であるのかを多くのチベット仏教の学僧たちが話題にしている。人間と同じく輪廻のサイクルにいる動物たちの痛みや苦しみに寄り添うことが菩薩の修行にとっていかに重要であるかを、多くの仏教者たちが強調する。大乘菩薩戒を受戒した僧侶たちの一部は食生活においても肉食を厳格に避け、放生に努め、自らの菩薩行の完成を目指したのである。これは戒律からの要請ではなく思想や哲学からの要請なのである⁽⁵⁾。この点が第二の観点である。

大乘の菩薩戒は、もともとは『大品般若経』に説かれる十善道を『華嚴経』の十地品が継承し、菩薩は十不善道から離れること、十善道を実践すべきこと、十善道を他者にも勧めて実践させる努力をすべきこと、という三つの努力目標を説いた。さらにそれを註釈した世親の『十地経論』では、離戒淨・摂善法戒淨・利益衆生戒淨の「三種戒」と名付けられた。これが広く「三聚浄戒」と呼び習わされる戒律観となっていくのである。『瑜伽師地論』『解深密経』『摂大乘論』『成唯識論』等で用語は相互に少し異なるが同じように三種の観点から菩薩の理想的な戒律目標が説かれるようになる。ちなみに日本仏教に於いてもこの菩薩戒の考えかたは重視され、天台宗から浄土宗に伝わった大乘戒の「圓頓戒」も摂律儀戒・摂善法戒・摂衆生戒の「三聚浄戒」によって構成される。

菩薩の三聚浄戒の三番目「摂衆生戒」はこのように当初は「良き行ないを他者にも勧めること」であったのが、徐々に「他者の利益の為に務めなければならない」という意味に解釈されるようになってきた。菩薩の律儀について纏めたチャンドラゴーミン(7c 後半)の『菩薩律儀二十』(Otani No.5582, Byang chub sems dpa'i sdom pa nyi shu pa: TTP 114-253-1-1)やその註釈をしたシャーンタラクシタの『菩薩二十註』(Otani No.5583, sDom pa nyi shu pa'i 'grel pa:

TTP 114-253-2-8)、ボーディバドラの『律儀二十難語釈』(Otani No.5584, Byang chub sems dpa'i sdom pa nyi shu pa'i bka' 'grel: TTP 114-261-3-2)等はチベットでも良く読まれ、各種の註釈書が著されている。彼らの関心は菩薩が利他行を行なう際にどのように注意すべきか、どのような条件の下での行為なら違犯にならないのかという点にあった。それらの議論の展開の中で、利他の捉え方に多くの異説が生まれてくる。例えば、後期インド仏教の論書には、大悲心があり慧眼によって有情の利益をなそうとする者には、本来は禁止される加害・殺生・非梵行などであっても許容されると説かれるものがある。殺生や偷盗、邪淫や妄語あるいは両舌や悪口や綺語などの七つの不善なる行為を行なっても、有情に対するおもしろい心の心を持ち、利他の為に善巧方便として行なうのであれば許される、と説明するものも現われており、その記述に注目するチベットの仏教者も現われて来る。

第4章 Tantric Perspectives では三番目の律儀〈密教戒〉に関する話題を追う。菩薩の善巧方便はあくまで利他の為のものであったが、密教の修行ではより積極的に固定的な世俗の倫理観を打ち砕く必要を説く。このような解釈はやがて特定のタントラの儀式の中で、アルコールや肉片を行行者や受者の口に含ませる儀礼まで生み出していくのである。タントラ儀式の供養物の中には、人間・犬・馬・牛・象の五肉を供えるべし、という指定まで現われる。字句どおり実践したとは思えないが、このような発想自体が初期の大乗仏教運動を進めた菩薩の感受性とは異質なものであることは確かであろう。

チベット仏教の歴史の中で三律儀 *sdom gsum* を最初に取り上げて考察したのはアティシャ Atiśa (982-1054)であった。彼は自らの著『一切三摩耶集』(Otani no.4547; *dam tshig thams cad bsdu pa*)の中で、この三つの律儀の特徴を対比させて書き出し、密教の「真言律儀」を最も優れたものとしている。サキヤパンディタ Sa skya paṇḍita (1182-1251)にも『三律儀細別』(BDRC:W1KG1686 *sdom pa gsum gyi rab tu dbye ba*)と題する著作があり、これに対して新サキヤ派のシャーキヤチョクデンやコラムパなど様々な論師が解説書を著している。ゲルク派のケートプジェも『三律儀安立略説』(BDRC:W30084 *sdom pa gsum gyi rnam par bzhag pa mdor bsdu pa*)と題する論説を著している。この三律儀の別に注目した戒律観は、常に出家修行者特に密教を学ぶ者の関心事であったのだ。

さて、宗教者と肉食との関わりを考察する前半とは少々異なるアプローチを採って、本書の後半部分では肉食主義がチベット文化全体の中でどのような位置を持つのかという問題に話題を移す。概してチベット民族の文化は本来、肉食主義とはおよそ相容れない傾向にある。第5章 A Necessary Evil ではチベット地区に住む人々の健康と、彼らの肉食習慣がどのように関わってきたかという点を議論している。多くのチベット人がチベット医学の知見を背景にして肉食の必要性を説いている。牧畜を主とするチベットの牧民の生活は動物食を抜きにして存在

し得ない。しかし最も信仰を得て来たのは仏教でありその教えは殺生を罪惡視している。著者は、民衆の一部が罪惡感を持ちながらも維持してきた肉食文化を「必要な悪 necessary evil」と表現し、彼らが仏教的には罪にあたると自覚しながらも愛し維持して来た自虐的な文化と捉えている。もちろん全てのチベット人がそんな風に捉えている訳ではなく、大多数の人は倫理的な罪惡感など一切なく自らの食文化を謳歌している。第6章 A Positive Good では、一般の民衆がどのように積極的に肉食を捉えているかを考察している。肉食は彼らの経済活動と密接に繋がって発展してきた文化であるし、彼らの民族的な誇りの一環でもある。この点では仏教が持つ影響力は極めて限定的である。「必要な悪」というようなネガティブな傾向はこれらの人には無い。但し、一般民衆が父母や恩人や地域の知人の追善の為におこなう法要では「八斎戒」と呼ばれる在家用の戒律を一定の期間を区切って守る習慣があるが、その斎戒に基づいて一定期間肉食は禁止され、多くの場合断食修行(「ニユンネー smyung gnas」と称される)も敢行される。因みに余談ではあるが、この書の著者は同じく食行為に関する禁戒でありながらこの「断食修行」に関してはあまり深く追求することがない。チベットの一般民衆にとって、肉食を避ける行為と断食とはほぼ同じような位置づけを持つが、著者にとってはその点はあまり関心を引かなかったようだ。

第7章 Seeking a Middle Way では、チベット人の社会が、いかにしてこの食の禁忌に関してバランスをとりながら対応しているのかという点を考察している。例えば高位のラマ達が完全菜食生活をすることは多く、しかし同時にその他の一般僧たちは健康の為に肉食をしたり、あるいは自然死をした家畜の肉のみを食したりする事実を著者は見聞している。あくまで罪ではあるが目くじらをたてて忌避されている訳ではない。彼らなりの解決の方法のひとつなのである。

この書が主として研究対象とする時代は解放前のチベットであるが、第8章 Epilogue: Contemporary Tibet では社会主義時代に入ってから事例にも触れている。つまり現代チベット仏教界での菜食主義運動である。近年急速にチベット人社会で菜食主義が広がりつつあり、その急速さの故に、旧来の牧畜と結びついた村落の組織との間で衝突さえおこっている。その運動の意図についての憶測も様々とびかう。つまり仏教社会と中央の政府の価値観との関係の地図が菜食主義運動によって書き換えられようとしているのである。チベット仏教の菜食主義化は漢族の仏教徒たちの支持を得つつある。

著者の動機と関心がチベット仏教と菜食主義との関わり、あるいは肉食の拒否とチベット仏教社会にあったことは疑い得ないが、その観点がチベット仏教を含め仏教世界が伝統的に持ち続けてきた論点と合致したものとは思えない。「肉食の是非」は仏教者が問題としてきたことのあくまで一部でしかない。つまりそれはその他の基本的な戒律である偷盜戒や不妄語戒あるいは不邪淫戒や不飲酒戒そして非時不食の戒律などと同じ重みを持ったものであって、菜食主

義だけを取り出して議論する理由は仏教側にはないのである。極めて専門的な知識を駆使しながら問題に迫って行った著者の努力や研究能力に大きな敬意を感じつつも読後に一抹のものの足りなさを感じるのは、評者だけではないだろう。

キーワード：チベット仏教、菜食主義、肉食、戒律、食文化

〈注〉

- (1) 西欧の仏教徒の多くは現在菜食主義の傾向にある。彼らが強く影響を受けた書は、フィリップカプリー師著『生きとし生けるものを愛しむ』で、この書は西欧の仏教徒に決定的な影響を与えた。Philip Kapleau, *To Cherish All Life, A Buddhist View of Animal Slaughter and Meat Eating* (New York, 1981)
- (2) Kaie Mochizuki, On the Scriptures Introducing the Prohibition of Meat and Alcohol by Dol Po Pa, *Acta Tibetica et Buddhica* 2:25-64, 2009；この英語論文を著者自身が日本語で簡略に纏める形で「チベット仏教における肉食と飲酒をめぐる」『インドの大地と仏教』（身延山大学教養選書Ⅰ）所収 pp.95-153. として改稿(2013年)されている。
- (3) Hou Haoran, Some Remarks on the Transmission of the Ascetic Discipline of the 'Single Mat' within the 'Bri Gung Bka' Brgyud Pa Tradition, In *The Illuminating Mirror: Tibetan Studies in Honour of Per K. Sorensen on the Occasion of His 65th Birthday*, edited by Guntram Hazod and Olaf Czaja, Weisbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag, 2015.
- (4) 下田正弘「三種の浄肉」再考『仏教文化』22, 1989. 等多くの論考がある；享保三年に没した本願寺派知空の『真宗肉食妻帯弁』という書物では、親鸞門徒の肉食許容が決して仏教の原則に反するものではないことを指摘している。彼はその書の中で「三種の浄肉」の理論を持ち出して殺生戒と肉食を全く別の問題だと論じている。(中村生雄『肉食妻帯考』青土社, 2011)
- (5) 『大般涅槃經 *Mahāparinirvāṇasūtra*』や『央掘魔羅經 *Āṅglimāliyasūtra*』或いは『入楞伽經 *Laṅkāvatārasūtra*』などの大乘仏教經典では食肉が悪鬼の所業であるかのように描かれ、それは肉親を食べるに等しい行為であり、仏性を持つ有情を食べるのであるから仏陀を食べるに等しい行為であるとまで表現する。